

熊本医学会賞をうけた

藤田英介さん(左)

熊本医学会発行の月刊誌「熊本医学雑誌」があるが、熊本医学会は、毎年一回、その雑誌に掲載された論文のうち優秀と認められた人に贈られる。受賞の論文は「有機水銀中毒に関する実験的研究」。先輩の指導、同僚の協力なくしては研究はできない、と藤田さんは感謝している。

三十四年 熊本医学部卒、インターン、家庭裁判所技官を勤めたあと三十七年、熊本精神神経科にはいり、熊本水俣病研究班の仕事に参加した。

水俣病は、工場排水と関係ある有機水銀(アルキル水銀)による中毒であることが、すでに水俣病研究班によって明らかにされている。

「ところが水俣病の発生と時期を同じくして、同じ地区に、生まれてからにして重症の中樞神経系の障害をもつ小児の一群があることが注目されたのです。これらの小児の疾患も、成人の水俣病に類似した症状があるのです。また、一般にいう脳性マヒ(重症心身障

害)とは症状がちがうのです」
当時、先天性水俣病の存在が疑われていたが、確証がなかった。藤田さんたちは、おそらく有機水銀が、母体を経出して胎児に障害を与えたのだからと考え、動物実験で、同じタイプの疾患を証明させることに成功し、見事に証明した。

「小児患者の母親にも、軽度ではあるが、水俣病の症状が認められています。微量の有機水銀が、妊娠中に胎盤を介して胎児に移行し、生後さらに母乳を介して移行し、胎児性(先天性)水俣病が現われたものと推定されます。しかし、動物実験の結果を、すぐ胎児性水俣病と結びつけるのは早すぎます。有機水銀の母体内での動向をみると、血球に集中しているのも大きな発見でした」

先天性水俣病

動物実験で見事証明

長びく補償に怒り

調査のため現地を訪れた初めのころは、不信と、憤りをもって迎えられたという。目をそむけたくないような悲惨な実情をつぶさにみてきており、また家族の怒りと悲しみを痛いほど知っているだけに、藤田さんは、患者への補償問題が長びいていることに怒っている。

「同じ症状の患者が大量に発生したら、すぐさま対応策がなされなければならないか」といって、何の策も講じられずに放置されたままでは、患者はふえるばかりです。そんな残酷なことは許されせん。研究者として

「日本の現状をみると、たとえ医学的にほぼ究明されていても、その研究結果が、どれだけ具体的に取り入れられて改善されたか疑問です。いや、当然考えられる事件の予防措置こそ、まず第一に講

「現場からいえば公害、中毒に関する立場からは、学問のきびしさと、社会的、政策的な処置とは、まったく切り離して考えるべきだと私は思っています」

最近、スウェーデンから調査員が派遣されてきたとき、人体に影響する許容量をしつこくたずねたことがあるという。同国では、製紙工業が盛んだが、紙にはえる力ヒをとるため、有機水銀を使う。有機水銀による中毒はまだ発生していないが、定期的に計量して発生



「まず予防措置を…」と話す藤田さん

疾患といわれ、今日では、いつどこで、どんなタイプの公害、中毒が起らないとも限らない。

「その意味でも、私たちは、水俣病を自分たちの問題として、いろんな角度から見守りつづけていきたいものです。水俣病は、医学的にも決して解決されたとはいえないのです。水俣病は熊本の伝統的な研究テーマですが、いまも一貫して深くほりさけて研究がなされているのを、私は、力強く思っています」

◇ことし二月、熊本逓信病院の精神神経科の新設に伴い熊本から同科部長に招かれた。熊本市黒髪町下立田四四四、恭子夫人、一男一女の五人暮らし。